

コレクション・プレステージ  
価格未定

彼の時計の特徴は、時刻表示が中心軸からズレたオフセンター・デザイン。そしてゼンマイの巻き上げと針合わせを、ケース背面の大きなリゼースで行うことだ。手巻き、Cal.2206 Hm. 18KRG。ケース直径41mm、厚さ11.3mm。入荷未定 ※現在、日本輸入元は未定)

ローメイン・ゴティエ

# ROMAIN GAUTHIER

BASEL  
WORLD  
2007

HALL 5.1  
STAND C01

ケース素材にはプラチナ、レッドゴールド、ホワイトゴールドの3種類。文字盤は、シャンパンとブラックがある



脱進機は緩急針のないフリースprung式。歯車の専門家らしく肉抜きされた美しい歯車を装備。ピスのスロットは波形。力が均等にかかりスリッブしにくい設計。ムーブメントのサイズは直径34×厚さ5.5mm。22石。パワーリザーブ60時間。毎時2万8800振動



歯車の専門家が  
その夢を形にした、  
既成概念に囚われない  
独創のタイムピース

ローメイン・ゴティエさんは1975年、ジュウ溪谷のル・サントエに生まれる。精密機械工学を学び、'97年、高級時計の歯車製造に従事。25歳のとき、自分の時計ブランドを立ち上げることを決意する



スイス取材の数カ月前、ネットやヨーロッパの時計雑誌で発見し、気になった時計師がいた。彼の名はローメイン・ゴティエ。どこかで会えたらラッキー!と思っていたら、あららフィリップ・デユフォーさんのブリスにいたのではないか!早速紹介してもらい、話ってきた。「私はエンジニア。フランソワ・ゴレイという時計の歯車メーカーに勤めていました。そこでは高級時計の歯車を製造していましたが、ある時、自分でも時計を作ってみたくなり、デユフォーさんの工房を訪ねてアドバイスを請いました。彼は話を聞き、即座に「それはおもしろい。是非、実行すべきだ」といったのです。

その言葉を聞き、私は決断しました。幸いゴレイの工場では、夜、仕事の後なら機械を使っている、といわれました。なんと彼は時計師ではなかった。それを知って独創性の秘密が少しわかったような気がした。つまり時計師ではないことで既存の概念にとらわれない自由な発想ができたのではないだろうか。だが困ったこともある。それは部品を作れても、高級時計にふさわしい仕上げと組み立てが、彼にはできないこと。そこでゴティエさんは、セバスチャン・ベルネイという若い時計師に仕上げと組み立てを依頼。こうして06年、ついにローメイン・ゴティエのオリジナル時計が完成した。それにしてもゴティエさんのようなエンジニアが、こんなシンプルで素晴らしい時計を作ったことに新鮮な驚きがある。おそらく、この時計は時計ファンに受け入れられるだろう。最近新興市場向けの高額なだけ取り柄の時計が氾濫するなか、自由な発想を形にする時計製作家の出現は、実に痛快なのである! (N)